

中世の絵画資料における 木製容器の変遷

結物容器の出現と発達を中心として

Development of Wooden Containers as Appeared in
Pictorial Materials of the Medieval Ages

石村真一

はじめに

① 木製運搬容器の種類と発達過程

② 桶の出現と発達

③ 樽の出現と発達

おわりに

【論文要旨】

本論における目的は、中世の絵画資料に描かれる桶・樽を事例として、新しい結物の木製容器がどのようにして発達していったかを検討することにある。

結物という木製容器は、先行する刳物、曲物、挽物、指物という容器に対し、極めて遅く大陸から伝来した。結物は桶と樽に分類されるが、いずれもローマ期のヨーロッパで発達している。中国では『清明上河図』に多数描かれていることから、北宋代には広く普及していたようである。

桶と樽は伝来した時期がやや異なる予想されることから、まず最初に桶について検討することにした。13世紀後半から14世紀前半の絵画資料を比較した結果、中国風景に描かれた桶と、日本の風景に描かれた桶が存在することが抽出された。当時の絵師は、中国文化をよく理解しており、桶の表現に中国に関する知識が活かされていることが明らかになった。

日本の生活文化に表現された桶は、『北野天神縁起』、『遊行上人縁起』の諸本に描かれた同一場面を標本とした。同一場面に描かれた桶を比較していく中で、『北野天神縁起弘安本』が桶の初見資料とされることから、13世紀後半に日本に桶が伝来したと規定した。さらに、14世紀前半に制作された『遊行上人縁起』諸本の同一場面に描かれた桶の比較を通して、初期の桶類は形状と構造が多様であり、中国文化の雰囲気醸成している要素があることを抽出した。

樽の出現と発達については、文献史料も参考にしながら検討した。樽は『山王靈験記頼川美術館本』、『酒飯論』という16世紀初頭の絵画資料を初見とし、文献史料に記述される内容とは100年近く遅いことが確認された。初見資料に規格化が進展していることから、15世紀後半には畿内の都市部で広く普及していたと推定した。